

四旬節第4主日

ルカ 15・1-3, 11-32

2016.3.6

イエズス会 柴田 潔神父

自分は、放蕩息子の立場なのか、兄の立場なのか、あるいは、父なる神様の立場なのか。その時々で、自分がどちらの立場に近いのか変わってくると思います。今日は、放蕩息子に自分が感じられたときの話しをします。

イエズス会では、2年ある修練の1年目に、神様から司祭に召されているのか確認するために大黙想という1ヶ月の黙想をします。その黙想は、自分は心から司祭を望んでいるのか、神様もそう望んでおられるのか、確認する大切な黙想です。その大黙想の中でも、放蕩息子の箇所を黙想しました。

黙想の中で、父の言葉がよみがえってきます。息子は私一人だったので、家が途絶えてしまうことを父はとても残念で、何とか踏みとどまって欲しいと願っていました。「教会の中だけの世界に生きていいのか？ 家族を持って信仰を生きる方が立派ではないか？」。わたしは父の質問に適確に答えられませんでした。第一、司祭になれる自信が自分にはないのですから・・・でも、最後に父はわたしを自由にしてくれました。

「お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません」。黙想するうちに、自分が放蕩息子に思えて仕方なくなってきました。父なる神様は戻ってきた息子をとがめることもなく抱きしめてくれました。父も、わたしを大切に抱きしめてくれていました。でも、わたしはそのことに十分気づいていませんでした。父に、申し訳ない気持ちで一杯になりました。「そうだ！私も放蕩息子のように実家に戻って、ごめんなさい！と言おう」。黙想指導者にそう打ち明けました。すると「戻ってどうするんですか？」と言われました。「そうか、お詫びを言いに戻るのはいいいけど、それから先を考えないといけない」。黙想はまた振り出しに戻りました。実家に戻ったら、一時は父を喜ばすことはできても、その先が見えません。わたしの人生は何のためなのか？ 父なる神様を第一に考えなくてはなりません。「父なる神様にどう応えるたらいいのか？」。祈った末に、「やっぱり司祭を目指したい」と決心しました。

修練長から特別に帰省を許されて、そのことを伝えに実家を訪問しました。父は飲んで迎えてくれました。「このまま司祭を目指したい」と言うと、父は、「2年も修行(イエズス会での2年の修練)したんだから十分だろう。もう、戻って来い」

と言います。広島修練院に帰るときにも、東京駅まで見送りに来て、「もうやめていい。行かなくていい」と言って引き止めました。わたしは後ろ髪を引かれる思いで別れました。

それから、10年以上経ちました。「神父になりたい望みは、自分のわがままなのか?」。そんな思いがずっとありました。悩むたびに、「神様、あなたについていくことで、父を置いてきぼりにしてるんでしょうか?」と打ち明けました。

「このままずっと時間が進むのか?」と思っていました。ところが「一度山口に行ってみよう」と父が言うてくれました。「元気なうちに、息子が働いている姿を見に行こう」と母が勧めてくれたんだと思います。父はもうすぐ84歳、母は77歳です。

両親の気持ちをどのように受け止めたらいいのか? 祈っているうちに、父なる神様がわたしの父を迎えてくれているような気になってきました。父をねぎらって祝福してくれています。神様がわたしの荷を軽くしてくれているようにも感じてきました。神様は、確かに計らってくださいます。

叙階式にたくさん来てくださった高円寺教会の皆さんがお祈りくださっているうちに、両親の考えが少しずつ変わったんだと思います。

山口の幼稚園では、両親を歓迎するお歌を練習してくれているそうです。元気な子どもたちの歌声で出迎えてくれます。サビエル記念聖堂でのミサにも与ってもらうつもりです。「2年で十分」と言っていた父が、どう思ってくれるのでしょうか? 「理解できないと思っていたけど、いい人生を選んだんじゃないか! それはそれでよかった」、そう思ってくれたら幸せです。

実家の父と父なる神様の両方から喜んでもらうことは難しいとずっと思っていました。でも、神さまは計らってくださいます。父は放蕩息子のわたしをゆるし、父なる神様は父を出迎えてくれています。

神様はわたしたちが思っている以上のことをしてくださる方です。その信頼をもって四旬節を過ごしていきましょう。